

都心に浮かぶ「緑の島」、皇居。高層ビルが立ち並び車が行き交う都心にあつて、多くの動植物にとつての楽園だ。ただ、お塚(ほり)の内側の生態系にも都市化の影響がじわりと及んでいる。その実態は緑地の大切さを改めて教えてくれるとともに、環境変化を知る手掛かりにもなる。調査にあつた国立科学博物館の協力を得て、皇居の生き物を紹介する。

都会のオアシス 皇居

調査は動物や植物などのタイプごとに研究者がチームを組んで実施。週1回以上の頻度で皇居内に入ることもある。

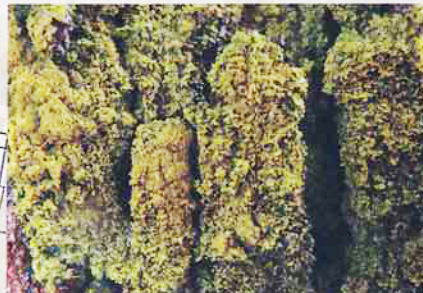
皇居の雑木林などでは都心では見掛けなくなったカブトムシが繁殖している。ここ数年、7月下旬〜8月上旬には週に30匹以上採れるときもある。樹液を出すクヌギなどが多いほか、天皇陛下の意向もあつて倒木や切った枝をできるだけのまま残してあり、幼虫の餌となる腐った木も豊富なためと考えられている。

使用済みペットボトルに少し手を加えて採集に使っている。バナナを皮ごと入れると腐って甘い臭いを出し、カブトムシなどが寄ってくる。いったん入ると、すべすべの表面を歩いて外に出ることはできない。国立科学博物館の野村周平研究主幹が考案。「ノムラホイホイ」と名付けた。

タヌキやチョウの楽園

国立科学博物館の調査

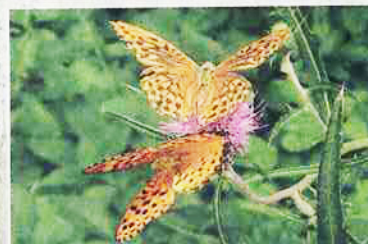
(吹上御苑など約58万㎡)
 第Ⅰ期……………1996～2000年度
 動物の追跡調査……………2001～05年度
 第Ⅱ期……………2009～13年度



最近の調査で大型地衣類のロウソクゴケを新たに確認した



タヌキもよく目撃され、皇居内で繁殖しているとみられる



パンジーを好むツマグロヒョウモン(上)と山地に多いミドリヒョウモン



ペットボトルを使った「ノムラホイホイ」の仕掛け例(上)と、採集された多数のカブトムシ



写真は国立科学博物館提供

回収した昆虫は種類や数を調べた後、放している。皇居を舞うチョウやタヌキは、都市化の影響がどうか

え。最近、目に付くツマグロヒョウモン。2005年の調査で見つかり、増え続けている。かつては年に

1、2度見る程度だったが、いまはいつでもどこでも見られるという。もともと雨の温暖な地域

に多かったが00年代に関東地方でも増えた。好物のパンジーが植えられた花壇が多いほか、農薬の使用が減

ったのが理由とみられる。市街地と皇居の間を自由に出入りしているようだ。山地に多いミドリヒョウモン

豊かな食住、都市化も影響

皇居の生物相調査
 動物3638種、植物1366種記録

皇居は総面積 115万平方メートル、東京ドーム約25個分の広さ。天皇陛下が自然に深い関心と配慮を持たれているのをきっかけに、国立科学博物館が1996～2000年度に吹上御苑などで「皇居の生物相調査」を実施。動物3638種、植物1366種を記録した。その後5年かけ動物を追跡調査。また09年度からは5年計画で生物相の第Ⅱ期調査を実施中だ。

豊かな緑地は独特の環境をつくる。環境省と首都大学東京の07年の観測では、夏の気温は昼夜を通して周辺市街地に比べ2度前後低かった。冷気は外にもにじみだすが影響は300メートル前後に限られていた。動植物の種類や活動との関係は今後の研究課題だ。

や、都心では希少種のウラナミアカシジミも見つかり、おり多様性に富む。都心の盛り場や住宅地に現れ、話題を呼んでいるタヌキも皇居に定住しつつある。1990年代から多くの目撃情報があり、繁殖しているとみられている。タヌキの生態には、天皇陛下も関心を持たれている。自ら調査に参加、国立科博の研究者らとの共著論文をまとめられた。

この調査は06、07年に実施。タヌキが特定の場所で排便する「溜め糞(ためふん)」の習性を利用し、糞を集めた。30カ所の溜め糞場から、計169個の新しい糞を採取した。

1匹のタヌキが1日平均1・9個の糞をすると推測され、1日当たりの糞の数をもとに単純計算すれば、最大14・5匹がいた可能性がある。

タヌキの行動範囲は広く、東京近郊など「どこから入ってきたとしても不思議はない」(国立科博動物研究部の川田伸一郎研究員)。糞からはアブラゼミやカブトムシといった昆虫、アスマモグラなどの哺乳類、種子などが餌と分かった。皇居は食べ物が豊富。人目にもつきにくく暮らしやすいようだ。

地味が目立たないが近年大きな変化があったのが、菌類の仲間や藻類と共生している地衣類だ。大気汚染の指標としても知られている。皇居では96、00年度の調査で葉や樹枝のように見える大型地衣類は4種しか見つからなかったが、09年度に始まった調査では16種を確認している。

きれいな空気を好むウメノキゴケ類や、汚染に比較的強いとされながら前回調査で発見できなかったロウソクゴケなどを含む。

東京都は03年に条例でディーゼル車の排ガス規制を始め、二酸化窒素(NO₂)や浮遊粒子状物質が減った。大型地衣類の回復は「ディーゼル規制による大気浄化の結果の可能性がある」(国立科博植物研究部の大村嘉人研究員)。

ただ、今回見つけたものは大部分が直径1〜3センチと比較的小さい。結論を出すにはさらに詳しく推移を調べる必要があるという。(編集委員 安藤淳)